

【101】海のGメンと呼ばれた男

かつて田尻宗昭さんという九州男児がいました。

昭和40年代以降の昭和を通じて、公害行政の分野で活躍した人です。

高等商船学校（清水）を卒業されて海上保安庁に入り、巡視船の船長を務めた全くの船乗りですが、昭和43年（1968）に陸に上がって三重県四日市市にある海上保安部の警備救難課長に就任しました。

当時、四日市港やその周辺の海は周囲の工場からの工業廃水による汚濁が激しく、社会的問題になっていましたが、公害対策の法律も不十分でした。

中央では今の環境省の原点とも云うべき厚生省の公害課で、初代課長の橋本道夫さんが水質汚濁や大気汚染等の対策に奮闘されていた時代です。

田尻さんは四日市港の目に余る汚濁に対し、海上保安庁の持つわずかな権限の「港則法」などという港の道路交通法みたいな法律に拠り所を求めて行動を起こしたのです。

同法23条に”水面にみだりにバラスト、廃油、・・・・、ごみその他に類する廃物を捨ててはならない。”（一部略）とあるのを頼りに、汚濁発生企業を追求し刑事事件として告発したのです。

係長時代の若かった私が、名古屋方面へ出張したとき、もう著名人になっていた田尻さんに恐る恐るアポイントを取り、四日市の海上保安部を訪問しました。

お目にかかってみると海上保安官なんていかめしい方ではなく普通の中年のおじさんだったので一安心したのですが、先ず港内を案内するというので船着き場へ行ったら、乗組員が4～5人直立不動で田尻さんと私を出迎えてくれて、警備救難課長というのは偉いんだと感心しました。

巡視艇から見た港内の水面は恐るべきもので、一面にまっ白で白ペンをぶちまけたというか海水の代わりに牛乳かカルピスで満たされていると見間違えるような光景です。

白濁の原因は、化学工業の重要な中間産物である二酸化チタンの製造で発生する排水や廃棄物が、港内に廃棄されていることによるもので因果関係もハッキリしているとのことでした。

事務所に戻ってから、田尻さんの説明というかお話を部下の人を交えず対面で伺いました。

田尻さん、やおら一葉の四日市港の図面を取り出し、それは裏側には写真や事業概要が載っている要は港湾管理事務所のパンフレットです。

折りたたむと表紙に当たる場所には港全体を見下した航空写真が載っています。

開口一番、”君たちこの写真を見て何か気付くことはないかね？”君ではなく、君たちと言われるのは、私ばかりでなく我々技術者や中央の役人に話しかけている積りなのでしょう。

その表紙を一目見て私も内心大いにうろたえました。

それは港の防波堤に囲まれた出口から外洋へ、まっ白な蛇のような帯状の流れが写っている写真です。むろん港内も一面の白い湖のようです。

なんとセンスの悪い表紙だろう。

土木屋が編集したパンフレットかどうか知りませんが、私は言葉を失いまともに返事できませんでした。

さらに霞が関のお役人もコーヒーばかり飲んでないで、時々現地を見に来いと叱られたり、厳しい先生の講義を聞く学生のような気分でした。

前後一時間半も時間を取って頂き、海上保安部を辞したのですが、たった一人の客を相手に情熱をこめて話をする田尻さんの迫力に圧倒されました。

田尻さんの活躍は、メディアや世論では「海のGメン」と呼ばれ評価が高かったのですが、海上保安庁の本来業務ではないのではとか、やりすぎだというような批判も強まります。

昭和48年（1973）に当時の東京都の美濃部知事に招かれて東京都に移り、残りの人生を公害一途に励まれ、昭和も終わって平成2年（1990）に62歳で亡くなりました。

田尻さんは、わが国の公害行政のパイオニアの一人として尊敬されていますが、私にとってはあのパンフレットを前に叱られた事を半世紀以上経った今でもハッキリ思い出すのです。